

詩 集

砂漠の河童

清宮 零

大宮詩人叢書

清宮 零 (きよみや れい)

- 本名 清宮勝一
- 1928年蕨市生まれ
- 埼玉詩話会会員
- 大宮詩人会会員
- 「立像」同人
- 詩集「風車」「宙の塵」
- 現住所 〒330 大宮市南中丸109

清宮 零 詩集 **砂漠の河童** 〈大宮詩人叢書第3期⑪〉

平成元年12月20日発行

著 者 清宮 零

発行者 宮澤章二

発行所 大宮詩人叢書刊行会

大宮市上小町209 (〒331) 山崎方

電 話 048-641-2717 振替 東京 2-139230

編集者 山崎 馨・廣瀧 光

制 作 麗文社 大宮市三橋4-122-3

電 話 048-623-8417

印 刷 中沢印刷株式会社

定価 1,000円

詩 集

砂漠の河童

清宮 零

沙漠の河童
目次

雑木林の奥で

8

畑のサンドイッチマン

10

粟粒

12

定年

14

街の朝

16

車の魔力

18

下らない幕

20

紙袋

22

空似

24

砂漠の河童

26

喪失

30

風揚げ

31

ム・ギ・ワ・ラとんぼ

32

稲妻

34

靴音

35

電車の中

36

再会

38

右掌

40

隅っこで

42

老いの戯言たふこと

44

旅から帰って

46

巨木の鮎いづみ

48

あとがき

砂漠の河童

雑木林の奥で

白い天井　白い壁　コンクリートの床。窓一つない大きな密室。天井の四隅に炭酸ガスの噴出口と　カメラのレンズ。

ベルトコンベヤーの上に　アルミ製の檻が十数個。その中で猛犬が吠える　仔犬がわめく猫が跳びあがる。小刻みに震える檻。

隣室の若い獣医師が遠隔装置のボタンを押す。ガス噴出　二分三十秒。ビデオのスローモーション画面のように　動から静へ。

檻の蓋が開く。ぬいぐるみとなった犬猫が吐き出される。ベルトが動いて隣の火葬処理室

へ。約三十分。煙も悪臭も出ない。

骨灰は民間業者に処分を委託。この地に焼かれたかれらの足あととは一個もない。墓標もない。だから一輪の花もない。

年間二十万頭の密室処理。飼い主が保健所に持ち込んでくる犬猫がほとんど。この施設の名は「動物愛護センター」

門柱には《動物と人とのふれあい》と彫られた青銅の表札。広場には放し飼いの仔犬と猫と兎らが 幼児たちと遊んでいる。

市街地から二十軒。深い雑木林の奥。鴉が三羽啼きながら上空を掠めて行った。この林に寝ぐらがあるのか。

畑のサントイッチマン

農薬漬けの

トマトづくりの名人が

自宅前の畑で

ひそかに有機栽培の野菜をつくり

毎日 家族だけで食べていた

その有機栽培畑の真ん中には

〈農薬散布済み〉のプラカードを

これ見よがしに

持たされている案山子が 二体

ちよつと傾いて佇っていた

数年後 名人が農薬中毒で急死

妻もその半年後に 喉頭癌であとを追った

広い畑に囲まれた農家の 二回の葬式に

農協と農薬メーカーの

大きな花輪 計三十本

祭壇に 粒ぞろいの農薬トマト

「桃太郎」 計百個

誰が持ち去ったのか

自宅前の畑の

ちよつと傾いたサンドイッチマンは

いつの間にか消えていた

栗粒

都市の駅前広場で

耳をつんざく

ポリユウムの軍歌

聞きたびに

憤然と 拒否の顔

剥き出しながら

上半身の肌

栗粒のようなツブツブ

さつ と広がるのはなぜか

甘美な旋律が体の中 駆けめぐり

眠っていたへ軍国少年のウィルスが

急に目覚めるのか

帰れない器に乗り

俺につづけよ！

と 海原に消えた

わだつみの声が

ふるえる旋律のなかに

うしろめたく聞こえてくるのか

生き残りの（特攻野郎）には……

青い地球の砂丘に

危うく立っている緑の塔が

陶酔の核を秘めた、あの旋律に

ある日 とつぜん爆発し

崩壊するかも知れない

戦慄の粟粒なのか

老いの齡を重ねて

なおその謎は解けない

定 年

販売促進会議の直前

薄いパネルに囲まれた

トイレの中

俺がひっそり坐っているのを

気づかずに騒がしく入って来た

二人の課長

——もうすぐ辞める部長の

企画なんて どうせ通らないよ

——そうかなあ

——常務がウンと言わんだろう

——そうだな

——そよれり次長の販売戦略案を推そうよ

——よしッ それでいこうや

ぐん とりきんで 額に脂汗

俺のくせの一つ

咳払いが出ないように